震災と商工業

大地震の大破壞は、僅かに數分間に過ぎなかつた。瞬間の大變化、其の以前と以後との多數國民の生活は憐れにも、全然其の境遇と事情を異にするものとなつた。商工業の素より多大の影響を蒙らざるを得ざる事、敢て論議を俟たない。

大震災後の商工業は、例へ一時的にもせよ、全然中絶せられたといふより外はない。震災直後僅に殘つた日用品の販賣は行はれては居つたが、是れは唯だ、手持品の有る限りに於て販賣せられたに止つて、通信、交通、運輸機關の全體的な杜絶は、商品の補充を飽く迄も不能ならしめ、商品によつては直に賣り盡されて了つた。是は單に震災地計りの現象でなく、全國を擧げて、一時取引の圓滑を缺き、不安を起さしめたのは、信用經濟の發達したる今日に於ては、實に止むを得ざる事である。

（二）

中井村に於て、震災の商工業に及ぼした影響中、最も大いなるものは、醬油製造、製米場、石油等が主であつた。工場は倒れ、倉庫は落ち、商店は軒を並べて倒れ、橋梁落ち、通信交通の機關も其の機能を失墜し、一切の交通絶たれたるに加へて、金融機關は鎖閉され、物資を得んとするも、信用は地に墜ち、荷爲替を組むの方法なく、僅かの現金を携帶して物資を求めても、之れを運輸するの便は

なく、よしや假りに自ら輸送し得ても、之れを收容すべき場所は得られず、商工業は殆ど經營不可能となつた。政府の應急對策であるモラトリアムは、經濟の小い村内へは、何等の影響を及ぼさなかつた。

今其の主要なものに就ての損害を擧げて見れば次の通りであつた。

	資本金	拂込濟	損害額
中井醬油株式會社	十萬圓	二萬五千圓	約五千圓
井ノ口倉庫株式會社	五萬圓	二萬圓	約百圓

震災と金融

中井村の金融經濟界は、大正二年を劃して、新時代に入つたと謂へやう。比較的山間にあつて、交通の便も思ふに任せなかつた關係上、銀行の利用、信用組合の組織等に就ては、殆ど是れを問題にして居なかつた。金策には、無盡を起すか、個々の資産家に賴るかの二途丈けで、所持の金員は、自宅に抱藏して置く方が多かつた。金に金を生ませる方面には、一部の人士しか通じては居なかつた。そこで如何に勤儉力行しても、村の致富といふ方面には遲れて居つた。

ところが、大正二年四月二十八日株式會社大磯銀行は、松本一番地に支店を設置して、始めて銀行

といふものが現はれた。それから、續いて七月には、城所源助氏の奔走の結果、無限責任中村報德信用組合が設立せられた。尤も、井ノ口には大正元年八月共助購買販賣信用組合が設立せられた。是等が中井村の劃時代的な現象であつた。

是等の金融貯蓄の出現と共に、是を利用する者逐年に增加し、勤儉貯蓄の美風も漸次に濃厚となり、何れも好調子を以て發達して來た。ところが、其處へ大地震が襲來した。此の大變災は、どんな影響を與へたらうか?

（二）

九月一日の大震災の爲め、中井村民の生活は其の根底を大破された。家を潰され、田畑を荒され、山林を崩され、激動の間を逃げ惑ふ外に、一時は何の考へも無かつたが、一度無事に落付た時に、第一に必要とする處は、食糧を得る事であり、家を起し、バラックを建つて、住家を求める事であつた。そこで現金を得る必要が起つた。故に此の際銀行が若し平日の樣に開店して居つたならば、預金に對する取付の殺到し來るのは勿論である。で此の取付は、獨り現金の必要のみからではなく、銀行其ものに對する不安の念が加つたものとすれば、其の程度は推測以上で、銀行として、斯樣な不時の取付に際して、之れに堪へる丈けの準備金があるかといへば、預金に對する準備金率の低い處から徵して、平時に於ても其の不可能である事は論を待たない。まして、震災の爲め、一方に貸付金の回收不

可能となり、他の一面に、有價證券の賣買の停頓した際に、預金の急激な取付は、彼等の最も苦痛とする處である。然し銀行にとつて幸とする處は、震災が土曜日に起り、翌日は日曜であり、當然一日だけは休業して、將來の對策を講ずる豫猶があつた一事であつた。

一面銀行も半潰の憂目を見たので、當然開始さるべき九月三日の時日に際會しても、事實營業を開始するに堪へなかつた。其の上、如何なる程度の取付を受けるか、大體の見當さへ付き兼ねたので、震災後に於ける混亂裡の經濟社界に向つて、開業の運びに至らず、金融機關を約一ヶ月に亘つて、全然休止の狀態に陷らしめたるは、折角此れ迄發達した村の金融史上に、特筆すべき悲慘事であつた。

（三）

是れは唯に本村のみではない。

京濱の金融機關は其の機能を停止し、阪神方面の銀行迄も取付の騷を演じ、全國的に擴大の形勢となつた。日本の金融界には、全く暗雲低迷し、如何なる大事變の突發があるかゞ測られなゝ危機に際會した。そこで、山本内閣は急遽閣議を開いて、支拂猶豫（モラトリアム）を斷行し、金融界に一種の戒嚴令を實施した。九月六日に發布せられた『支拂延期令』の緊急勅令が之れであつた。

然し、今回の如き大變災に際しては、單に一片の勅令や、内閣の說明位では、國民一般に安心を與へる事は出來ない。金融業者は、依然として自衞第一主義を執り、預金者は資金の缺乏に苦しみ乍ら

も、一錢の引出しさへも出來ず、一文の融通をさへも得る事は出來なかつた。而して煩悶焦慮の日を送らねばならなかつた。郵便貯金は一日三十圓、次で一日百圓以下の拂出をする樣になつたが、村民で郵便貯金を利用して居る者は、至つて少く、大部分は銀行と、信用組合とに貯金して居るので、其の開業は一日千秋の思で待たれた。

此の間、中村報德信用組合は、中央會に對して低利資金融通の交渉を起し、遂に八千圓を借り入れ、預金の拂出しと貸付に、約一萬五千圓を支出した事は大な功名といはねばならない。

此の組合は震災前は、常に二萬四五千圓の貯金高を有して居つたが、震災後激減して、一萬二千圓前後に落ちた。

大磯銀行支店は九月三十日漸く營業と開始したが、是時に至つては、引出よりも寧ろ貯金の方が多かつた樣な現象を呈して、當の銀行家を面くるはした。然るに營業開始後約二ヶ月目の十二月三日に至つて突然帳簿整理を名として休業の札を掲げたので、今度は、村の金融界に大破亂を生じた。

（四）

大磯銀行支店閉鎖當時の、支店元帳に因ると、預金は十一萬三千七百二十圓六十八錢であつて、貸出は十萬五千七十七圓三十六錢、此の內割引手形が四千九百三十圓、資金八千六百四十三圓三十二錢であつた。

支店としての營業成績から觀察する時は、別に閉鎖する程の逼迫した事情は存しない樣に見受けられるが、是れは、日本の銀行が、小資本を擁して小規模の營業を行ひながら、他銀行と對立して、過度の競爭を爲す爲め、頗る狹い利鞘を以て、利益を漁り、利鞘を大ならしむる爲め、危險の伴ふことの多い營業を厭はない風があるから起つた問題で、本店の營業方針が粗雜、亂暴であつたと觀るより外はない。

是れが爲め、預金者は或は集會を催して前後策を講じ、焚出をして氣勢を添へ、銀行に集り、又は支店長宅を訪れ、百方方法を盡したが、本店の整理が付かない爲め、如何とも術の施し樣もなく、逼迫した年末を辛じて通り拔けて、翌年度の懸案として殘された。

震災と交通運輸及水道

鐵道も無く、電車もない本村に於ては、一部井ノ口方面を除いては、全く手車、馬力、牛馬又は人力に依て、漸く運輸の便を計つて居るに過ぎない有樣である。ところが、震災と共に、橋梁は全部陷落し、道路は到る處無慘な大破壞をした爲め、東海道方面は勿論、秦野其他の方面との交通は全く杜絕して了つた、急を要する石油其他の日用品は、餘義なく、人手を借りて、辛くも其の需要の一部分を滿し得たに過ぎなかつた。

其の被害狀態を見ると、縣道の破損個所は、延長三十五町、村道の破壞せる延長百町に及び、縣の橋梁の落下使用に耐へざるもの十ヶ所、村營橋梁十九ヶ所、橋梁といふ橋梁は、殆ど其の全部が落ちて了つたのであつた。

又、本村の一部井ノ口を通過する湘南軌道株式會社經營の輕便鐵道も、震災と同時に杜絶し、漸く復舊した十月二十四日迄は舊中村と同じ樣な難境に立つた。

是れが爲めに、村としては、早速村會を開き、取りあへず、應急策を講ずる事になつて、土木費として三千八十五圓、橋梁費として四百六十二圓、治水費として五百七圓の支出を可決し、一時の急を救ふ事に努力した結果、漸く十月三日頃より、一部の交通は緒口を見出して、復興の第一歩に入る事が出來た。

是等橋梁の損害は、役場の調査によると、九百二十四圓、道路六千百七十圓、治水堤防の損害一千十四圓、其他二百圓總計八千三百八圓を算するに至つた。

水道　本村を通じて唯一の水道である井ノ口の水道は、明治四十五年一月、先覺者岩本亥太郎氏の熱心な主張の元に、同村部落青年が俵を編み、零細の資を集めて得たるを基礎として、工事を起した。最初は經費の關係上竹を使用して居つたが、修理の困難な爲め、土管を土臺として、一部に鐵管を使用して大正十二年に至つた。ところが、大地震の爲め、無慘にも其大部分を破壞され、一時は飲料水

に大恐慌を來した。蓋し水道の完成と共に、從來の堀井戸は殆ど全部、覆をして使用しなかつたので、井水は飲料水としては不適當になつて了つた。そこで、互に有無相通じつゝ、幾多の困難と戰つて、一方に飲料水の供給を計ると共に、他面、復舊工事を急ぎ、使用する事が出來る樣になつたが、一月十五日再度の强震に、全く修理さへ困難を感ずるに至つた。此の事業に絶望し、新に井戸を堀らうとさへした人があつた位であつたが、試練に打ち克つ復興の意氣物すごく、逐に一切の困難を征服して五月十日、其の完成を見たが、これは水源池より貯水タンクに至る三百八十間を二吋鐵管、給水用三百間に對しては一吋管、用水池二ヶ所に修理を加へ、更に二ヶ所を新設し、タンクに修理を加へ、小タンク二個を增設し、更に學校に至る九十間も一吋鐵管を使用して、斷水、水不足等の危險を除去し、防火用に供する事の出來る樣になつた。此の新工事費四千二百七十四圓で、此の內一千一百圓は縣の補助を得た。

震災と疾病　今次の變災に伴ふて起つた疾病では、何といつても外傷が一番多かつた。一體地震に因て起る傷害は、機械的外力が加つて生ずるもので、此の外力は、一般に非常に强いものである。例へば、家が倒れて梁に壓され、屋根が落ちて瓦に打たるゝといふ樣なもので、其の力は鋭利な刄物の如きもので加はる場合は少く、多くは鈍體に依て身體に加はるものである。從て、其の受ける外傷も挫創、裂創挫傷、打撲傷、骨折といふ種類が多い。此の强い力が、身體の廣い部分に加はるか、又

は重要な機關に當るかすると、忽ち生命を失ふもので、所謂壓死といふものが之れがある。今回の震災の爲め、中井村全體の死亡者は、全部で二十四名であつて、其内男八名、女十六名、負傷者は、男十二名、女九名の二十一名を算した。是れを細列すると、松本では、男一名、女六名、境では、女二名、男三名、境別所では、女一名、井ノ口では、男二名、女一名、鴨澤では女一名、北田では女四名岩倉では男一名、田中では男女各一名宛の死亡者を出し、負傷者では、鴨澤一名、古怒田一名、境一名、境別所二名、田中六名、藤澤一名、久竹一名、北田二名、井ノ口六名を出した。

負傷者病名

外傷種類	挫創	挫傷打撲傷	擦過傷	裂傷	切創	刺創	骨折
患者數	一	二	八	六	一		三
百分率	四・八%	九・四%	三・八%	二・九%	四・八%		一四%

勿論、是れ以外に小負傷を蒙つた者の數は多數にあるに違ひないが、何れも醫師の手を待つ必要の無かつた程度のものと見て差支無からう。

翻つて内科方面に就て考察して見やう。

平生頑健の結晶の樣な男であつても、急激に變化した生活樣式、換言すれば、今迄は大きな天井の

高い家に、ノンビリと生活を營んで居つたものが、一朝災害に遭遇して、バラック小屋に住み、飲料水、食糧に多大の不自由を忍び、若しくは、餘震の警怖に、幾夜をか戸外に假寢の夢を結んだりした爲め、身心共に著大な影響を受けた事は明な事實である。まして、婦女、小兒、殊に姙婦に至つては、其の影響した處が、實に多大なものであつた事は、何人にも容易に想像の出來る事である。然し、此の影響を綜合的に、確實な統計に基て調査する事は、殆ど不可能で、斷片的に集めて、其數に依て斷案を下す事も亦困難な事で、唯だ醫師の手に就かれた數字から、不完全ながら考察し得るに過ぎない。

震災直後に現はれた疾病現象として、小兒の營養不良、並に之れに伴ふ所謂烏目患者、皮膚病患者、腎臓炎患者等が多かつた。蓋し災害後は、住宅の構造、衣服の不足勝、勞作等の爲め、不攝生な生活法を爲した爲め、腎臓炎とか皮膚病に冒かされ、食糧不足に伴ひ營養不良に陷るもので大體の統計を擧げると次の樣になつてゐる。

病名／性別	腎臓炎	疥癬濕疹	營養不良	腦膜炎類似	夜盲症	其他
	二八	六四	一二	一	一八	二二

又正確な數字を掲げる事は困難であるが、震災の爲め、老人、病人等で死期を早めたものが多々あ

つた事も震災の一現象である。

大震と名所舊跡

曲淵勝左工門吉景墓　天文十三年（西暦一五四四年）甲斐の雄武田信玄は、自ら手兵八千を率ひて、輕井澤に陣し、尾臺城を攻めた。時に板垣信形が先鋒を承つて、勇戰奮鬪に努めた。然し敵將尾臺城主又六郎、其の弟治郎左衞門は、戰場往來の古强者で、戰略戰術に長け、流石の信玄も、是れを破る事が六ケ敷かつた。此の時先鋒を承つた板垣信形の僕に曲淵勝左衞門吉景といふ武士が居つた。吉景は味方の躊躇するのを見て、奮然身を躍らして、敵の陣營に打ち入り、名譽ある一番槍をつけた。味方は此れに勢を得て、『吉景を打たすな。敵將を打ち取れ！』と、同志功を爭ひて進擊した。敵の治左工門も城を出て奮戰亂鬪したが武運拙く戰死した。吉景は敵將六郎の首級を獲て、功名第一の戰功を立てやうと、勢鋭く六郎と血戰、遂に是を打取つて了つた。それから武田氏の滅亡後、家康は武田家の勇將猛卒を辭を低くして召したので、吉景も家康の麾下に參して、幾多の功名を現はしたので、家康は、其の勇、其の膽、其の略を賞して地を賜ふた。そうして家康關東入國の時には、更に賞地を賜つたが、後剃髮して玄長と號し、文祿三年十一月二十三日七十六歲を以て死だ。玄長寺裏の墓碑は四男七左衞門が建立したものらしく、其後一時廢墓同樣になつて居つたのを、子孫の人々が文化四年

再建した。是れは現存して居るが、地震と共に轉覆した。然し其後玄張寺住職の努力で目下は舊に復して居る。

鬼王三郎墓　鴨澤の須藤氏の後丘にある。中央に山型の石塔があるが、文字苔蒸して讀む事が出來ない。兩側に五輪の塔がある。又稍離れた處に弟の碑がある。周圍の樹木などから推測すると、鎌倉時代のものであるらしい。地震には轉覆したに過ぎなかつた。

日露戰役紀念碑　東洋の一島國を、一躍世界の大强國と爲した日露の大戰を紀念する爲めに建てた是の紀念碑は、震動と共に根元より倒れ、同時に側に嬉戲して居つた幼童の頭部を粉碎して血を流した。然し、其後任鄕軍人會其他の努力で、復舊した。

寺社の被害

イ、神社

鄕社八幡神社　八幡神社は、應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、高良明津、猿田彦命、大山祇命、日本武尊、菅原道眞等を合祀した神社であつて、俗に此れを五所の宮といつて居るが、是れは、欽明天皇の御代に、豐前宇佐に初めて、八幡宮を勸請したのを一として、二は日光、三は男山、四は鎌倉、五は當社である所から、謂ひ習したものであると謂はれてゐる。神社には社地として八百五十九坪、

本殿、幣殿、拜殿、神樂殿など完備して居る。八幡神社の寶物や色々な記錄などは、文明元年正月朔日（西暦一四六九年）に起つた火災の爲めに燒失して了つたので、詳細は判らないが、賴朝祈願所六十一社の一つであるといふ事である。長祿元年拜殿、鐘樓、井桓等の落成した棟札が所藏されてゐる。又、嘉歷二年の棟札、文明十三年。御遷宮札には、相模國上中村郷としてあるが、往昔は士屋三郎、曾我太郎兩家から神事供物を納めたものであるといふ之である。是れは近郷十五村の鎭守で、赤田、高尾も氏子である。

鐘樓は長祿、元永の棟札があるけれ共、近く寛永六年再鑄したもので、神寶弓一張は、曾我五郎時政の寄附になつたもので、是の外、刀、脇差一腰、太刀一振があるけれ共、何人が奉納したものか判然してゐない。現在は中材榮之助氏が神官として奉仕せられてゐる。

神社は大地震に鳥居を大破し、拜殿、幣殿等に大損害を及ぼしたが、敬神の念の篤い村民は、萬難を排して是れが復舊に務めた結果、現在では、震害があつたかと疑はれる程になつた。

村社簑笠神社　井ノ口、五分一の鎭守神であるが、祭神は判然しない。文明十八年聖護院准后道興回國記に、

簑笠の社とて、社頭ましまける、しばらく、法施し侍りて

天が下守らんための誓とや

といふ歌がある。天正十一年（西暦一九八三年）の棟札には、導師京憲寺別當三光院其他中村外記、同圖書助、金子和泉守、若狭守、尾上圖書助、加藤重兵衛等の氏名が記してある。境内に櫻位權現社があるが祭神は詳でない。兩神社共に、震災の影響を多大に受けたが、其後間も無く復舊した。

ロ、佛　閣

大泉寺　鴨澤の大泉寺は、米倉寺末で開山は鐵叟といふ人である。釋迦を本尊として、觀音堂に正觀音を安置し、腹籠に根體觀音といふ銅像がある。震災は普通で、とり立てていふ程のものはなかつた。

玄張寺　良屋山廣略院と號する此の玄張寺は、淨土宗で、增上寺末である。寺地は長高寺の廢跡で、文祿中曲淵吉資父吉景刀葬地として、一宇を建立し、僧來譽を延て開山とした。來譽は下總行德の人で、後同地に復住した。此の寺號は吉景の法名廣明院良屋玄長に執り、後張の字に改め、本尊には彌陀を安置してゐる。大地震と共に、後方の斜傾畑、數、山林等崩潰して、前の川を埋沒した。舊跡曲淵吉景の墓碑其他は何れも轉覆、多大の損害を蒙つた。

城明院　玄張寺と同じく雜色にあつて、雜色山見國寺と號してゐる。玉瀧坊配下の修驗で、不動を

本尊としてゐる。古刀一振を百足丸と稱して、正恒の銘がある。長さ二尺六寸、曾我の郎等道三郎の所持であると。大被害はなかつた。

泰翁寺　從前岩倆にあつた時は、岩倉山と號して居つたが、松本に移つて以來松本山と號する樣になつた。中郡堀藏林寺末で、開山は端秀、開基は青木尾張守信時である。法名を泰翁乾康、天正十八年六月十三日（西歷一五九〇年）寂、信時は始め武田家に仕へたが、後德川氏の麾下に走つた人である。本尊には釋迦を安置し、鐘樓には元祿二年（西歷一六八九年）鑄鐘したと記してある。大震の爲め本堂を大破せられたが、壇家の努力に依り、約一千圓を投じて一切の修覆を了した。目下大本堂の新築に着手して居る。

比奈窪の秀翁寺、田中の廣翁院、前澤の淸岩寺は被害比較的輕微であつた。

米倉寺　井ノ口の米倉寺は、井寶山といひ藏林寺末で、釋迦が本尊である。古は鳳安寺といつて現在の乾方にあつたそうである。寛永の頃地形米倉平太夫繁次、現在の地を寄贈して堂宇を建てて再興し、寺等を改め父信繼（甲斐米倉鄕から悉地を遷された人）を開基とし、開山は宗高であつた。天和二年稻葉正則から境内三石三合寺領（一石四斗三升五合）其他山林、竹林等を先規の通りに寄附した。白山社といふのがあつて、寛永七年鑄造の洪鐘がある。震害は甚しい方ではなかつた。

珠泉院　五分一の翠城山珠泉院は、境の宗玄寺に次ぐ大害を蒙つたもので、庫裡を全潰して了つ

た。此寺は總持寺末で開山は豁山榮達といふ人で、元和九年十一月二十八日寂した。

宗玄寺　境の曲淵山宗玄寺は、武藏龍穩寺末の曹洞宗で、開山を洪洲といひ、開基は曲淵光明で宗玄は其の戒名である。本尊に釋迦を安置し、鐘樓には正德三年(西暦一七一三年)鑄造の鐘がある。此の鐘には施主曲淵市兵工軌隆の刻が見へる。大地震では、寺社を通じて、被害第一で、本堂、庫裡一切は倒潰した。是れは東南二丁余の個所に大龜裂大崩潰のあつた關係からで、今尙改築には至らない。併し寺寶一切には被害はなかつた。

流言蜚語紛々

大激震は、幸ひ命を拾つた人々は、お互に昨日に變る我家の樣、裸一貫の自分の身の上も打ち忘れて、互の無事を祝し合つてゐた。然し一日數百回の餘震には、不安の心が不斷に往來してゐた。其處へ三日の朝頃から、誰れいふとなしに、俄然として鮮人襲來の飛報が、村中を包んで、新らしい不安と恐怖とは、村人の胸の中に燃へ上つた。

『朝鮮人が拔刀して襲來したとよ』

『何んでも爆彈を持つて、金持の家を襲ふんだとよ。東京や横濱の大火事は、皆な鮮人の仕打ださうだ』

『日本人は皆な殺して了ふつもりで、毒藥を井戸へ入れて歩くさうだから、皆な氣を付けなきやあいけないせ。』

『そんな話し斗りして居たつて、仕方がないから、鮮人を一人も入れない樣に、手段方法を講じなければ駄目だ。何んでもいゝから、手に持つて警戒をしやうぢやないか？』

『それは大賛成だ！』

不安の内に加へられた恐怖は、その影が非常に大きく寫る。然も、斯る大變事の場合、事の眞相を傳ふる新聞紙は、悉く發行不能に陷り、電信も電話も用をしない。唯だ口から口へと、噂は噂を生み、狂人不狂人共に走るの狀を呈した。對外的交通の絶へた時とて、村内は戰々競々として、或は竹槍。銃、鎗、大刀など、思ひ思ひに手に携へて、村境の邊を固めた。其の間、喜劇も及ばぬ大間違があつたり、俄芝居までもありそうな滑稽も起つたが、四日となり、五日、六日となつて、漸次事の眞相が判明するに從つて、此の浮説も自然に消滅した。

義人に謝す

人類史上、未曾有と稱せられた這般の大變災に、最も心痛し、困惑を感じた者の内でも醫師は其の雄なるものであつた。激動、烈震、負傷者、病人、藥處置、是等の光景は廻り燈籠の樣に、頭の中を

グル〳〵と廻つて居る。眼に映するものは、此世ながらの修羅の有樣だ。然も周圍を顧れば、其處には一切の藥品は散逸して、手の附けやうもない。求めんとしても京濱は大火、大震に全滅し、補充も、補給も一切が不可能である。如何に全能の醫師といへ、醫藥無くして、人の生命を救ふ事は出來ない。『自分の双肩には、今幾百といふ尊い生命が托されてゐる。どんな困難を嘗めても、是を救はねばならない。病める者の聲、傷ける者の叫びは、耳朶を打つて止まない。よし死ぬるも責務を盡さう！』

自己の天職に飽く迄も忠實な三浦克己氏は、決然として起つた。而も忽ち人を大阪に走らせて漸く必要量の藥品を求めた。此の貴い、血の交つた樣な藥品も、中井村に醫藥絶へたと聞いた時、

『輕少ではあるが、是れで氣の毒な方々を救つて下さい。』

と、惜氣も無く、解熱劑、外用藥等を役場の高橋氏（現助役）を通じて中井村へ分與せられた。高橋氏も、同氏の厚意に滿腔の謝意を表し、是れを歸村と共に島村醫師に手渡し、應急の處置に事欠かぬ事が出來た。仁者は得易いが義人は得難いといふ。吾々は改めて、松田町の義人三浦醫師に深く感謝の意を表さざるを得ない。

職務は辛いもの

井ノ口駐在所詰の古谷野巡査は、丁度大地震の日、五分一方面に衞生の檢査に廻つて居られた。大

體の調査も終つたし、晝時でもあるので、踵を返して來やうかとしてゐられると、グラグラとあの大地震であつた。

見ればあたりの家は、盛に倒れ、壁土は黄い煙を立てて空に吹き上つてゐる。

『これは大變だぞ。』

と、急いで家に引返し、重要書類の整理やら、對策に取りかからうと、波に浮ぶ木の葉の樣な身體を起して、家路を目指して飛ぶ樣にして歸りかけた。すると忽ち五分一の方面からは。

『ジャン、ジャン』

と、出火を告ぐ半鐘の音が起つた。

『やつ、火を出したか！』

古谷野巡査は、もう家族の安否とか、家の倒潰とかは打忘れて了つた。此の場合に火事を大きくしては申譯はないと、忽ち起る責任觀念に、又も踵を返して、半鐘の音を目指して進で行つた。漸くにして、辿り着いて見れば、其れは唯だ急を告ぐ警鐘であつて、火事ではなかつた。ホット安神して村人に、火の用心を聞かせ、避難の場所や方法を敎へながら、空の駐在所に歸つて來た。而して家族の無事と、書類の安全とを見た時には、何の言葉も出なかつた。やがて又後を言ひ殘して、再び警衞に出て行つた。職務がらとはいへ、家を忘れ、身を忘れ、急に處された事は、村民の今尙ほ眼前に殊

に美しい話の一つである。

身を賭して學校を救つた
勇敢な二青年と二職員

ゴーッと遠雷の樣な、一種異樣な響がしたかと思ふ間も無く、突然グワンと天井に突き上げられる樣に感じた瞬間、忽ちグラグラッガラガラッと校舍は、地にひれ伏して了つた。

『地震だぞッ！　消火ッ！　火を氣を附けてッ！』

露木校長の聲は、破れた室の一隅より響いた。露木校長の消火合圖に、辛くも屋外に飛び出した先生達の內、岩木先生、石井先生は、忽ち火の元の安全を計つて、更に重要書類の搬出と藥品の取り出しに全力を盡した。然し何といつても、ペチャンとなつた校舍、餘震は尙も猛威を振つて居る時、氣計りははやつても、仕事はどうにもならなかつた。

『先生ッ御手傳に來ましたッ。』

こういつて飛び込で來たのは、宮の青年尾上林君と、北窪の尾上喜代治君の二人であつた。

言葉も終らぬ內に、此の二人の青年は、奮然として、倒れた校舍に飛び込み、直に職員室に走つた。職員室は、已に强酸類の瓶、上下に倒れ、破壞されて、惡臭を放ち、手を觸れれば、燒き盡さん有樣

である。かてゝ加へて、フォルマリンの壜も潰滅し、惡瓦斯は、鼻を攻め、　襲ふて。眼はグラグラと廻りそうになつた。呼吸も困難になつた。死生の十字路に立つた勇敢な二青年に、三職員は、已に顏面蒼白となり、一歩進めば、其處には只だ冷い死がある計りになつた時。

『何ノ！　死んでも學校を守るぞッ。』

と、最後の努力に、死を賭して進み、漸く目指す黄燐を見出した。天祐か、壜は完全であつた。

『あつた！　見付けたッ』

『早く外へ放り出せッ！　早く。早く』

五人の努力は報ひられ、死から脱れて、壜を校庭に投じた。瞬間、黄燐は空氣と化合して物慘くも燃へた。五人の面上には、期せずして喜の色があがつた。二青年の眼には嬉し涙さへ宿つた。

『さア、今度は書類だ。』

斯うして、此の二青年の勇敢な行爲の爲めに、無事に學校を救ひ、一切の書類も散逸せずに濟んだ。是の報一度府知事の耳に達した時、知事は、我子の事の樣に喜ばれ、感謝狀に添へて、金一封を贈られた。足柄上郡全體で七八人しか此の感謝狀は得なかつたに、中井村丈けで五名を占めたるは、村の誇とする處であらう。編者は再び繰り返す。勇敢な二青年よ、其の名は尾上林君、尾上喜代治君。三職員よ。其の名は露木校長、岩本先生、石井先生。

善人の及ばぬ『惡黨』の美學

――陰に隱れた義人の情――

『惡黨よ』『博奕打よ』と世人からは爪はじきされ、『あの野郎か』といつて、一切が相手にされず、十七年の長い長を、闇を求め、暗い影を拾つて歩むんで來た、小說の主人公の樣な男があつた。然し過去の罪の恐ろしさに飜然と悔悟し『人間性』に立返つたが、其處には、尙ほ暗い、冷い浮世しかなかつた。彼には再び暗い心が起きかかつた。危機一髮、彼は人生の十字路に立つたのであつた。此の時、彼の懺悔と知て、暖い同情の滴を與へ、胸を開いて彼を迎へ、業を與へて、彼を『人間』にした義人があつた。其の暖い情、深い恩に、果して彼は何を以て報じたらう。村人は彼の行に對して、尙昔日の感を以て迎へるであらうか。まア話を聞いて下さい。

九月一日の晝時、闇から棒よりも不意に襲ひ來つた地震に、丁度役場に居つた彼は、地上に鞠の樣に授け出された。立ては倒れ、起れば轉がり、身體の自由を失つて、漸くに丸太に身をさゝへた。其內に役場は潰れ、近隣の家は倒れ、山は崩れて高く黃煙を擧げ。悲鳴、叫喚、雜沓、大混亂を來した。彼は漸く自分の身體に歸るや否や我家を指して、よろ〳〵と走り出した。而して一町餘も行くと、道に一人の老婆が幼兒を連れて倒れて居たので、急いで其の二人を引き連れ、比較的安全な稻田の中

に避難させ、又も家路へと急だ。（この老婆は關野貞藏氏の母堂と同氏の幼兒であつた）。

漸くにして山を越へ、畑を通つて家に戻れば、家は己に潰され見る影もない。妻女は傷付き血潮に染り、小供等は驚怖に聲さへも出なかつた。彼は身を起して近所の安否を尋ねた。すると下の家では妻女細野トラは、倒れた家の中に其儘になつて居る。餘震は盛に來る、誰れしも是れを助けんとする者も無い。彼の血は沸き、俠氣はむら〳〵と起きて身を提して家を破り、柱を挫いて、身に幾個所かの負傷さへ負つて漸く床の間に倒て、氣絶した彼女を救ひ出した。それから誰れしも、怖ろしい一心で、心の平靜を失ひ、何にが何にやら、たゞ茫として居た時、彼は早くも自分の諸式を持ち出して、四軒分のバラックを急造して、近隣の避難者を迎へて住居を與へた。

三日の事であつた。彼は近所の倒れた家を起し、住家丈けでも直さんとしたが、倒れた家は、金挺子位では、動きそうもなかつた。より强力な『キリン』が無ければ、如何とも出來ないのを發見した後は直に『キリン』代金の捻出方に就て村人に相談した。其の金さへ出來れば村の例れた家、潰れた家を直ぐにも修覆しやうと說いた。しかし夫れに對しては、唯だ冷笑が報られたに過ぎなかつた。彼は考へた。自分の誠意を疑つた。自分が此の村に盡すのは此の時だ、だが、金がない。熟考數刻、意を決した彼は、小沼直治氏を訪れ具に事情を開陳した。是れを聞いた小沼氏は彼の壯擧と義氣に大に賛したが、一面他の同業者からの苦情を懸念し、それさへ無くば用立てやうといふ話であつた。喜び

勇だ彼は、直に城所源助氏、及び駐在所に小林巡査を訪れて事情を話した。誠意は通り其の間の懸念無きは保證され、遂に小沼氏より二百金を借り受けて歸宅した。ところが村では其の話を聞いて、反つて驚いたと共に恥ぢたのだつた。他村の小沼氏より借用して、村の修覆をしたとあつては、村中の恥だといふので、二十八戸の相談會が開かれたが、結局、地震直後の事後の事とて、全く金融の途絶へ、何分具體化さなかつた。そこで、小島鐵五郎氏と早野勝五郎氏とは、村の爲めとて、相談の結果、各々三十五圓宛を據金し彼を助けた。彼はかくして七日午後三時、靜岡指して『キリン』を求めに出發した。道もなく、橋も無い、山又山を越へ、死を賭し、生を棄て、只管に道を急いで遂に靜岡で四挺の『キリン』を求め、死中生を得て村に歸つた。歸つた處、村の相談會は開かれ、其の結果、彼は自分辨當の二圓で、道具代も取らずに、唯社會の爲に働いた。眞劍に働いた。其の間には、食ふに米無く買ふに金無き人々の憐を思ひ、小沼氏に又もや二俵半の米を借り、一斗、二斗宛と振り當てて、食糧難の危急を救つた。更に『キリン』代金の殘額を二十圓位宛三軒程に融通し、生計を助け、十月二十五日迄、晝夜兼行、遂に村全體を復舊した。仕事の降る時とて、五圓十圓の仕事は幾らでもあつた。然し『惡黨』は更に是れには眼も呉れなかつた。手辨當二圓八十錢で、喜んで働いた。彼の『義俠』はどれ程、村の役にたつたか。かくて彼は村の復興に努力し、密に助けられた恩人に報いた。彼れとは誰れ、古怒田の清水滿三郎其人である。蔭の恩人とは誰れ、小沼萬二郎、小沼吉治の二氏である。

救つた者も、救はれた者も、共に美しい實を結んだ。これこそ正しい意義ある人間性に目覺めた、社會奉仕であつた。性は善なり、徒に過のみを責む可きではない。

此父にして此子

學校は、地震の爲めに一溜も無く潰れた。幾百の生徒は、學ぶに家なく、教育上將に由々敷大問題たらんとした。然し此の當時、人は少く、仕事は多く、一日四圓や五圓では、仲々に見向きもしなかつた、然りある村の豫算は、十圓十五圓の人を使ふ事は許さない。徒に心許りはあせつても、人無を如何せんと嘆じて居つた時、一週間に亘つて、手辨當を携へ、懸命に學校の修覆を完成した感ずべき青年があつた。勿論一文の金さへも受取らない。眞乎、村の爲め、生徒の爲めに盡したのだ。此の青年名は秀勝、姓は清水、滿三郎君の長男である。此の親にして此の子ありといひつべしである。